
KIDS ARE ALRIGHT

ゴロすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K I D S A R E A L R I G H T

【Nコード】

N 2 8 0 5 B

【作者名】

ゴロすけ

【あらすじ】

主人公、祐孝^{ゆたか}の恋あり、笑いあり、涙^{なみだ}あり？の等身大スクールライフ。

プロローグ（前書き）

どうも、ゴロすけです。なんつーかその、初めて書いたんで、読
みづらいかもしれませんが、まあ読んでやって下さい。

ブローグ

夕方、すっかり暗くなった頃。教室でいつものように大洋を待つ祐孝と前田。たわいもない話で盛り上がる。話の内容はというと、誰が可愛いとか、誰の胸がデカいとかといった思春期の彼らには有りがちな、異性の話。

「祐孝って、実はみのりとか好きだべ？」

「あ？みのりい？」

祐孝は眉をひそめる。

「うん、早瀬みのり」

「……何で？」

怪訝そうな顔をした祐孝に前田はしれっと言う。

「ラブコメの王道」

どうやら、祐孝がみのりと幼なじみだからだと言いたいらしい。

「それはない」

「絶対に？」

「ありえない」

祐孝がその可能性をキツパリ否定すると、前田は安堵の表情を浮かべた。

「……そっか」

そして、少しはにかんだ様子で続ける。みのりが好きなんだと。

プロローグ（後書き）

読んでくれて、ありがとうございますです、ハイ。ってなワケで
プロローグはこんな感じです。これから本編？に入りますんで、良
かったら引き続きお付き合い下さいませ。ではでは。

第1話：THE 3名様

冬の空を、雲がほんわかと流れてゆく。

その日、その午後、その時刻。祐孝は、教室のベランダに佇んでいた。

手摺りにべったり背中を付け、空を見上げる。

「見えた？」

その横を陣取った大洋が尋ねる。大洋もまた、祐孝と同様に空を仰いでいる。

「全然……」

「つかジャージがうぜえ」

「だね」

実はこの二人、空を見ている訳ではない。

ベランダからスカートの中を覗いているのだ。

「好きだね、お前らも」

前田が会話に加わる。

前田は窓のサッシに足をかけ、慣れた様子でベランダに降りた。

「お前もな」

祐孝は、ベランダに出た前田がちゃっかり、同じ体勢でいるので

ツッコんだ。

「バ〜レ〜たあ??」

「バレるも何も、なあ？」

「顔が性犯罪者」

「お、言うねえ〜大洋」

「オーイェー」

得意げな大洋。したり顔でチツチキチー。

「それよか、前田」

「ん？」

「この前のはマジなん？」

この前、正確には10日前の放課後。確かに前田は、みのりが好きだと言った。そして協力してくれ、と。

しかしあれ以来、それについて全く触れていない。

だから祐孝は聞いた。本当にみのりが好きなのか？と。真意を確認する為に。

「…好きだよ」

一拍置いて答える前田。

その場にいなかった大洋が、何の話？と、どちらともなく聞く。

「恋の話、略してー…？」

「コイバナー！！」

大洋は祐孝に某テレビ番組のくだりをさせられた。腑に落ちない様子で、祐孝をひたと見つめる。

しかし祐孝はそゆ事、と言って、生パン観察を再開した。見兼ねた前田が説明する。

「うっそ、マジ？」

大洋が瞬く。前田は少し恥ずかしそうに頷いた。

「祐孝はいねえの？」

一部始終聞き終えた大洋が矛先を前田から祐孝に移した。

「あ？」

「好きなヤツ」

「いない」

即答する祐孝。顔は上に向いたまま。

「何で？」

「スカートの下にジャージ穿くから」

「こだわるね、祐孝くん」

大洋が半ば、呆れ顔で言う。そして、前田が諭すように続けた。

「やっぱ寒いし、仕方ないじゃね？」

「ダメー!!」

しかし、祐孝はそれに対しむつつりと答えた。

それはまるで、おもちゃ売場で駄々をこねる5歳児のごとく。

「禁止、禁止! ジャージは禁止!!」

「んじゃ、お前も脱ぐ?」

大洋がパーカーのフードを引っ張る。

祐孝は少し考えて、すぐに首を振る。

「んじゃ、しゃーない」

言い包められた祐孝は、その場で地団駄を踏む。

「オレはいいの、今は前田の話でしょーが」

「そりゃそーだ」

「で、どーなん? 実際」

大洋はみのりとの進展具合を訊いた。

「いやあ」

前田は、ばつが悪そうに頭を掻く。どうやら、全く進展していないらしい。

「そつかあ、んじゃまずは仲良くなんないとな」

「仲良くったって、もうダチじゃんよ？」

祐孝がブーたれる。全然見えないので生パン観察は諦めたらしい。

「甘い、激甘だよ祐孝君」

コレだからお子様は、とでもいいたげな大洋。

「ダチつってもいろいろあるのだよ？」

大洋はひたすら男と女について語る。3人の中では唯一の彼女持ち。ちなみに今の彼女は8代目となる。

およそ20分、昼休みの大半を使った大洋講演会は授業の始業チャームと共に終了した。

祐孝はそこである任務を与えられた。

第2話：その女、凶暴につき…

何が、責任ある任務を与えるだ。ただのパシリじゃなか。

大洋講演会にて前田、みのりの親善大使に任命された祐孝は、ふてくされていた。着任早々の初業務が不服らしい。

親睦を深めるには、まず遊ぶこと。そう言い切った大洋は、祐孝にみのりを誘えと命じた。しかもみのりの友達も誘ってお前も行けと。

今更ながら、引き受けた事を後悔する祐孝。

（何で、オレも行かなきゃなんのだ…面倒臭え）

引き受けたからには全力で遂行するべきなのだが、祐孝は些か往生際が悪かった。

どうにかして自分が行かなくて済むようにと、思考を巡らす。そして―。

大洋が彼女と行けば良いではないか？祐孝はふと、そんな事を考える。

大洋の彼女、加奈枝、とみのりは仲がいい。大洋と加奈枝は付き合い合っているから、自然と前田はみのりと2人きりになれるのでは？

（やっぱオレって天才）

授業そっちのけで絞りだした会心の言い逃れに祐孝は自画自賛した。無意識に顔がニヤける。

「何企んでんの？」

隣の席の彩世が、白けた目つきをした。祐孝は顔をしかめる。ほ

つとけ。

「教えない」

彩世は祐孝を一瞥すると無言で手の甲をつねった。

「んぎゃっ」

あまりの痛さに机に突っ伏す祐孝。

「ごめんなさいは？」

「…ない」

「ん？」

彩世が片眉をピンとはね上げる。それが答え？ファイナルアンサーかと。

祐孝はつねられっぱなしの可哀相な左手と、彩世の顔を見比べて観念する。

「じ…めんなさい」

よろしい、と勝ち誇ったように、頷く彩世。

祐孝は赤くなった左手を擦りながら、不敵に微笑む彩世を盗み見た。

（死ねブス）

彩世の外見は『美人』なのだが、祐孝はあえてブスと罵った。後

が恐いので声には出さないが。

「祐孝？」

しかし、邪まな感情をかぎつけた彩世が、物騒な目つきになった。作り笑いを浮かべる祐孝の二の腕を殴る。筋パン。俗にいう筋肉パンチ。

「\$%#&」

身悶える祐孝を無視して彩世は、さっさと話を戻した。

「で？」

「あ、ああ、みのりを遊びに誘って…」

言いかけて祐孝は、口をつぐむ。彩世に詳細を説明する必要はない。まあ、祐孝の場合、説明するのが面倒だっただけなのだ。

「何？祐孝ってみのりの事好きだったの？」

「まっさかぁー」

ラブコメの王道に走るつもりはない。ましてや三角関係なんてゴメンだ。

「じゃ、何で？」

「友情を育むために」

「はあ？」

「みんなでお出かけ」

（オレは行かないけど）

先程考えたナイスプランを思い出し、再びニヤける祐孝。

「じゃあアタシも行く」

「……はい？」

「アタシも行きたい」

ダメなの？と彩世が細い眉を吊り上げる。
威圧的な彩世の態度に、尻込みする祐孝。先程、犠牲になった左手が、まだ痛い。

祐孝は渋々、彩世の参加を了承する。

（ってかオレプランが…）

彩世が参加することになり、必死で考えたプランが台無しになった祐孝は再び机に突っ伏す。

（マジ最悪…）

第3話：バカは死ななきゃ直らない

大洋の声が、耳元でわんわんこだました。

「何考えてんだよバカ！」

みのりを誘わないで彩世を誘った祐孝を非難する。

「あい、とういましてーん」

「バカ」

大洋は、祐孝の頭を小突いた。いったーい、と祐孝がワザとらしく倒れる。

「お待さん、やめとーせ」

「なあーに、心配するでない、初やつよのお……」

「待てえーい」

「むむ、何ヤツ！者ども、出会え、出会えー！」

「って誰が止めんだよ！」

前田までもが三文芝居に加わってしまったので、祐孝がツッコむ。

「だって楽しそうだったんだもん」

「もん、つて…」

祐孝は深くため息をついた。祐孝としては、何でもいいから前田に責められたかったのだが、前田は祐孝を責める気がないらしい。それどころか、前田は祐孝に頭を下げた。

「つかゴメンな」

「いや、オレの方こそ」

面倒臭えとか思ったりして…。

いつもなら自分は悪くないと言って、絶対に謝らない祐孝だが、この時ばかりは素直に謝った。

誰がどう見たって祐孝が悪い。それなのに…。

「はい、よくできました」

大洋が、手を2回叩いて話を本題に戻す。

「それよりどーするよ？」

彩世が参加する事になった為、みもりとその友達を含めると女が3人。こっちは祐孝と前田の男2人。確実に1人あぶれる。

「つかお前が来れば？」

「オレ？」

「そ、加奈枝を誘えば丸く収まるっしょ？」

「うーん、それはそうなんだけど……」

今まで散々仕切ってきた大洋が肩をすぼめた。

「大洋？」

すっかり意気消沈の大洋を、前田が不安そうに見つめる。

「行こべーよ」

祐孝は、『なにかある』と勘ぐったがワザとバツクレた。
自分だけ逃げようたってそうはいかねえ。

大洋の腕を掴み、ねえ、ねえ、と落としにかかる。が、前田が2人の間に割って入る。

「無理ならいいよ？」

「……………」

祐孝と大洋が顔を見合わす。祐孝は大洋に軽く目配せした後、コクリと頷く。

大洋は観念し、参加を表明する。

「よし、行くか」

「ってかどこ行くの？」

綺麗にまとまった。と、思った矢先、祐孝が訊く。

「「はいいつ？」」

大洋と前田がハモる。

彩世を誘った、というくらいなので、既に場所は決めてあると思
つた2人。 のほほんと言い放つ祐孝に深くいため息をつく。

「あれ？」

何かマズった？と祐孝は大洋と前田の顔色を窺う。

「ほんつとバカ」

「祐孝らしいね」

「おう??？」

3人は、誰からともなく笑いだした。そりゃあもう大爆笑。
放課後の静まり返った教室に、3人の声がこだまする。

で、結局どうすんだ??？

第4話：ミッションインポステイブル

結局、彩世が参加する旨を伝えただけで、どこに行くかは未定のまま。

（やっぱ遊園地かしら？）

その日の夜。祐孝は、漠然と行き先を思い浮べ、みのりに電話する。

「遊園地行かない？」

当たり障りのない雑談のあと、祐孝はそう切り出した。

「何？どうしたの？」

祐孝に誘われるとは思ってもいなかったみのり。熱でもあるのか？と訊ねる。

「たまにはさ」

祐孝は誤魔化した。正直に言ったら多分、来ない。下手に身構えられても面倒だ。ここは慎重に、それらしい事を言ってみる。

「つかみんなで遊びに行こうと思って」

「ふーん」

「で、どお？行く？」

「どおっしょつかなあゝ」

みのりは悪戯っぽく言つて、祐孝の反応を窺う。

「えっ？行こべよ！」

どうしよう発言に焦った祐孝は、必死にみのりを誘う。ここでつまづくワケにはいかない。なんとしてもみのりを連れて行かなくては。負傷した左手の為にも。

（うん、って言えバカ！）

祐孝は心とは裏腹に、低姿勢に撤する。そのかいあって？みのりは漸く首を縦に振る。

「しょうがないな」

「よし、言つたかな、絶対だぞ！」

途端に強気になる祐孝。

「ん？何？」

祐孝の豹変ぶりに、またもやみのりの意地悪心に火が灯る。

「いえ、絶対来て下さい」

祐孝は慌てて低姿勢に戻る。傍らにあった枕を小刻みに殴りながら。

(コイツ、おもしろがってやがる……)

祐孝は、また頼み込まなくてはならないと思い、うなだれる。

「みのりちゃん……」

しかし、今度はあっさりみのりが行くと断ったので祐孝は肩を撫で下ろした。

「やっぱり祐孝をイジめるのは楽しいナ」

「おい……」

笑いながら言うみのりに力なく突っ込む祐孝。いよいよに遊ばれている。

疲労こんぱい、衰弱しきっている祐孝に、みのりは訊ねる。

「ってか誰が行くの？」

「あ？」

「遊園地」

「あ、ああ、前田と大洋、あと女は……」

「大洋？」

みのりは祐孝の言葉を遮った。やはり大洋とみのりは何かあるらしい……。

「大洋いたらマズい？」

「マズくはないけど」

祐孝はあえて、深く追及しなかった。そお？と言って続ける。

「んで女は加奈枝と彩世」

全く気にならないワケではないが、みのりが問題ない。と、言ったのでそれを信じることにした。

「まあ、そんな感じだからよろしく」

「うん」

「ほいじゃあオヤスミ」

「オヤスミ」

みのりとの電話を終えると、祐孝は前田と大洋にメールを送った。

『任務完了！』

第5話：ある朝の風景

任務完遂の翌朝。祐孝は後悔していた。

自分も行かなくてはならないのだ。もっと慎重に場所を決めるべきだった。

（カラオケのが良かった）

このクソ寒い季節に遊園地…外で遊ぶなんてありえない。

肩をガクツシ落とし、校門をくぐる祐孝。本気で落ちている。

「おはよっ」

祐孝は下駄箱でみのりと一緒になった。

「おう」

「つか、寒いね？」

「だって冬だもん」

当たり前のことと言ってんじやないよと、祐孝が憎まれ口をたたく。昨日の低姿勢が嘘のよう。まあ、これが2人の本来の姿ではあるが。みのりは片眉を吊り上げ、怒りの鉄槌を祐孝の背中に見舞う。

『ドスっ』

鈍い音とともに崩れ落ちた祐孝。ちょっと涙目である。

「あにすんだよ！」

「しつけ」

みのりはぴしゃりと言って、祐孝を制する。

（にやろお）

教室まで約5分間の道程を2人はショートコントさながらのやり取りで突き進む。

「朝から元気だね、それってネタ？」

祐孝とみのりが教室の前で言い争っていると、加奈枝が声をかけた。2人は顔を見合わせ、ツッコむ。

「「チョット、チョットチョット!!」」

加奈枝の言うとおり完全にネタと化している。

加奈枝は、双子並みに息のあった2人の突っ込みに、凄いと感嘆の声をあげた。

「鍛えてますから」

祐孝は得意げに胸を張る。

「誰がだよ!？」

「うがっ」

本日、2度目のみのりの鉄槌。

ワザとらしくいじけてみせる祐孝。幼馴染の暴力を涙ながらに訴える。

「このドメ？ドメス？？ゴメス…？」

どうやらドメスティックバイオレンス（家庭内暴力）と言いたいらしい。

「ゴメス？誰だよ！？」

みのりが再び眉を跳ね上げる。どうにも単語の出ない祐孝は仕方なく、適当な言葉で応戦する。

「…このドモ ルンリン…クルが…！」

「ドメスティックバイオレンス」

しかし、みのりにソッコーで訂正されてしまう。見事なツッコミに加奈枝は爆笑。祐孝は、思いがけず、ハニかんだ。チョット恥ずかしかったらしい。

「おう…」

「しかもDV使い方間違ってるし…つか何？ドモ ルンリンクルって？！」

みのりは更に追い討ちを掛ける。とことんSである。意地悪そうに笑い、完全に勝ち誇った様子。大方、シンデレラの継母といったところだろうか…。

（にやるおお…）

「ん？なんてえ？？」

（この勝負、負けられねえ）

祐孝は、回転の鈍い起きたての頭に鞭打って、返しを考えた。

「オバサン化した君の必須アイテム、ドモルンリンクル」

最高の返しをしたと、したり顔の祐孝。満面の笑みでみのりを一瞥する。

しかし、直ぐにその顔は苦痛の表情へと変わった。みのり、本日3度目の鉄槌。それはもう、会心の一撃…いや一撃必殺とも言っべきか、なんとも見事な正拳突きであった。

第6話：恋は盲目！？（前書き）

久々に再開：ちょっとサボってましたがお付き合いしていただければ幸いですm（――）m

第6話：恋は盲目！？

昼下がりのベランダ。いつものように手摺りに背をつけ、並ぶ三人。左から祐孝、前田、大洋。

ココアをすすりながら、祐孝が何げなしに訊ねる。

「そーいや、どこがいいん？」

「ん？」

訊ねられた前田が、目を見張る。どいやら質問の意味が分からないようだ。

祐孝がみのり。と、言うと前田が軽く頬を染めた。本当、純なやつ…。前田の素直な反応に、祐孝もつられて八二かむ。前田が女なら、今ので惚れているところだ。

祐孝はそうゆうタイプが好きなのである。だから、分からない。前田がみのりに魅かれている理由が。人それぞれ好みがあるとはいえ、普通、正拳突きをぶちかますような輩に惚れないだろう。

「な、どこがいいの？」

祐孝はもう一度訊ねる。前田はより一層、頬を赤らめ俯いた。

「全部…かな？」

「！？」

祐孝の二の腕があわ立つ。さぶい。と、いうか、ありえない。祐孝は答えに納得できず、勝手に否定する。

「それはない！」

「えっ？ないの？」

「ない！あつてはならない！！」

祐孝が、自信満々に言いきったせいで、前田は狼狽えた。自分のことだというのに、なぜか不安になる。

「オレはありだと思っけどな」

しかし、大洋の一言で自信を取り戻した。

「全部って思えるなら、本気なんだろう？」

またしても頬を染める前田。

「……………」

祐孝は怪訝な表情を浮かべた。全くもって分からない。

「マジで全部？」

改めて前田に訊ねる。

「うん」

「グーで殴るトコも？」

「え…？あ、うん」

「つか殴られてんのお前ぐらい」

大洋がツツコむ。

「おう？」

祐孝が瞬く。目をパチクリさせながら、そうなの？と、前田に確認する。

「…そだね」

前田が、引きつった笑いを浮かべた。大洋の言つとおりらしい。

「うそ〜ん」

軽くショックを受ける祐孝。みんな殴られていると思っていたよ
うだ。

「日頃の行いだな」

何故か勝ち誇ったように、大洋がニヤニヤする。

「いや、アレはジェラシーだ！」

「「はいい？」」

「オレができる」だから」

祐孝の言葉に二人が顔を見合わせた。そして、肩を震わす。

「「それこそない！」」

「絶対？」

「「ぜ・っ・た・い！」」

言い切られて祐孝のプライドに火が点いた。確かに日頃、誉められる行いはしていない。が、あんまりだ。

祐孝は、二人をぎゃふんと言わせるために頭を捻った。

「じゃあアレだ、みのりがオレのこと好きなんだ！」

「！？」

「つい好きなコをイジめちゃうアレ！」

「……………」

（あれ？外した？！）

祐孝の言葉で空気が一変した。それで祐孝もやらかしに気付く。

（マズった…）

「なぐんちって」

必死に取り繕う祐孝。これは気まずい。すかさず大洋もフオロ―を入れる。前田は泣き笑いというか微妙な表情を浮かべていたが、

大洋に倣い祐孝をグリグリした。それにより、張り詰めていた空気は解け、いつものバカ三人に戻る。

「ごめんな…」

チャイムが鳴るころ、祐孝はポツリと言った。聞こえるか聞こえないか、微かな声で。

第7話：Yの悲劇

放課後、教室を出ようとした祐孝を彩世が呼び止めた。

「ねえ」

「ん？」

振り返る祐孝。

「……………」

相手が彩世だと分かると、祐孝は無言できびすを返した。

「ちよっ」

何事もなかったよう歩きだそうとする祐孝。しかし、あっけなく捕獲されてしまう。

「ぐえっ」

彩世がパーカーのフードを掴んだので、動くと首が絞るのだ。

「ぐるじいんスけど…」

祐孝はこのままじゃ死ぬ。と、抗議した。

「じゃ、動かなきゃいいじゃん」

（ムキーン！）

彩世の的確なツツコミに、祐孝はその場で地団駄を踏む。

（可愛くない…）

「なあに？」

彩世が物騒な目付きになった。表情を読んだのだ。

祐孝は身の危険を感じ、逃げようとする。が、もちろん無理。

「ぐはっ」

勢い良く足を踏みだしたせいで、さっきよりも強く首が絞った。

一瞬、死んだお爺ちゃんに会えた気がする…。

「殺す気か！？」

「自業自得」

彩世がピシヤリと言って、祐孝を制した。祐孝はぜいぜいしながら、むくれる。正論すぎて、言い返せない。

（なんて憎たらしいコなんでしょう）

「アンタに言われたくない」

「！？」

またしても表情を読まれる祐孝。急いで顔を背けるが、既に手遅

れである。

彩世は祐孝の首に腕を回すと、がっちり固めた。そのまま絞めあげる。

「えっ、ちょ…ギブ、ギブ」

たまらず、祐孝は降参した。あまりの早さに、彩世が呆れている。

「情けないなあ、男でしょ？」

（男だから辛いんじゃないボケ！）

祐孝は心の中で叫んだ。どうやら、首よりも体の密着が問題らしい。祐孝は力ずくで、彩世をひっぺがそうと、もがく。

「悪霊退散〜！」

しかし、それが逆効果。彩世は振り落とされないように、空いた手を祐孝の腰に回した。自然と密着度も上がる。普通なら、かなり『おいしい』状況である。

（ぐわああああん）

が、今の祐孝には全然おいしくない。むしろ苦すぎる。

「ゴ……メンなさい」

耐え切れなくなつて、祐孝は謝罪した。背に腹は代えられぬ。

「どおしたの？」

あつけない幕切れに、彩世が目を瞠る。

(ニブっ)

祐孝は毒づいた。もちろん心の中で。

「悪かったわね、鈍くて！」

「おう？」

祐孝は、眉間にブツといシワを刻んだ。

これだけ正確に読めるのに、なぜ、あれだけ分からない！？と、ツツコミを入れたくなる。

「だって女の子だもん」

「えっ！？」

祐孝は、ハツとして彩世を見た。しかし、言ったのは彩世ではない。その後ろでニヤつく大洋だ。大洋はニヤニヤしながら続ける。

「そして祐孝は……？」

大洋が、あはぐんみたいな顔で彩世に訊ねる。彩世も、さすがにそれで分かったようで、祐孝を睨み付ける。

「な、何だよ、お前がひつついてきたんだろ！？」

祐孝は開き直った。自分は悪くない、と。

「ほお、そいつは災難だったね」

大洋がワザとらしく同情してみせる。そして、神妙な顔つきで訊ねた。

「で？気持ち良かったん？」

「…うん、柔らかか…って違っ！」

（バカ！お前はどっちの味方なんだよお）

そんなこと問うまでもない。大洋の笑顔が全てを物語っていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2805b/>

KIDS ARE ALRIGHT

2010年10月10日02時58分発行